

歴史的な社会認識形成のための教育内容編成

— Environmental Studies のための教科書シリーズを手がかりとして —

竹中伸夫

(2006年10月5日受理)

The Formation of Teaching Contents for Making Social Recognition Historically
— the case of textbooks published for “Environmental Studies” —

Nobuo Takenaka

The aim of this study is to explain the structure of scope and sequence about the formation of teaching contents of textbooks which make much of shaping social recognition historically, and to show the historical significance of this structure.

Therefore I used the plural textbooks which have been published in nearly same time from same publisher for different age's students, inquired the formation and the scope and sequence of teaching contents, and analyzed the structure of the formation of teaching contents.

Consequently, I explained the unique structure of scope and sequence concretely in order to make social recognition historically.

Key words: England, Formation of Teaching contents, Sequence

キーワード：イングランド，教育内容編成，シーケンス

I 問題の所在

本小論の目的は、歴史的な事象などを手がかりとして現在の社会に関する認識を形成させようとする教科書を取りあげ、教育内容編成のあり方を考察することである。すなわち、その現代社会に関する認識形成という目的を果たすために、どういう視点・側面から教材や内容を選択し、順序立てて配列・組織し、教授するかというカリキュラム編成上の問題に関して、教科書を手がかりとして、解明することである。

そのために、そのようなモデルの典型例と考えられる、1960年代後半から80年代初頭にかけて、社会認識形成を通して市民的資質を育成するための教科書として実践された Environmental Studies¹⁾用の教材として、イギリスの Macdonald Educational 社が1980年代初頭に発行した『街とその周辺』シリーズ²⁾と『社会生活』シリーズ³⁾を分析対象とする。それぞれのシリーズの内容編成を解明し、両シリーズを比較することから内容編成構造と原理を分析・抽出したい。

このような研究をおこなう意義としては、以下3つがあげられる。

第1は、実用主義的歴史教育における教育内容編成構造の解明をおこなう研究となっているということである。我が国では、歴史的な事象などを手がかりとして現在の社会に関する認識を形成させようとする教育は、実用主義的な側面を持つ教育論として意義あるものと認められている⁴⁾。しかしながら、そうした実用主義的な歴史教育をいかにして段階的に進めていくか、そのためにいかなる教育内容を組織・編成すればいいか、という問題に関しては、十分に考察されてきたとはいえない。そこで、そうした主題について最も先進的に取り組んできているイギリスに事例を求め、具体的な究明をおこなうものである。

第2は、イギリスにおける歴史教育論改革の体系的な解明研究の一部を構成するものとなっていることである。イギリス（主としてイングランド）では、第二次世界大戦ごろまで、政治史中心の教育内容編成を採用した歴史教育がなされてきた。こうした教育の問題

性としては、事実の羅列による教育内容編成、無自覚な取捨選択がもたらす国民意識の無批判的な形成などが指摘できる。そのため、こうした従前の政治史中心の教育内容編成を改革し、新しい教育内容編成を計画し、具体的な教科書を開発して改革を行い、実用主義的な歴史教育をめざすものへと段階的に歴史教育の変革を志向してきた。本来、歴史教育内容編成改革は、社会の変化（要求）、歴史学の学問研究の変化（要求）、歴史教育学の変化（要求）などによって、目標、内容、方法のさまざまなレベルにおいてなされるものである。イギリスにおいては、改革はまず、歴史学の要求による教育内容改革として結実する。しかし、この教育改革はあくまで過去の個別的な歴史事象に関する認識を形成させる教育の枠組みの中で、その教授内容や教授方法における改革となっており、極めて限定的なものとなっていた。こうした歴史教育改革はさらに進められ、主として社会の変化とその要求を受け、従前の問題性を意識し、教育目標・内容・方法における改革へと展開する。今回の事例はその事例として位置づけられる。というのも Environmental Studies という教科は、従来の本質主義的な歴史教育に対して、現代の民主主義社会に主体的に生きる市民を育成することが社会から求められるようになっていく中で成立・展開した教科である⁵⁾といえるからである。そのため、こうした文脈に基づき、イギリスの歴史教育論改革の一環として同事例の構造を分析・解明することは、これまで十分になされてこなかったイギリスの教育論改革の体系的な解明研究にとって意義があるものと考えられる。

第3は、特異な教育内容編成論の解明が可能となる点である。我が国の社会科は、約60年前、現在の社会の問題を考える総合社会科を主として小学校や中学校でおこない、その上で、東洋史や人文地理という個別科目において、その科目固有の学問的知識の教授を行なうというカリキュラムとして成立する。この統合から分化へといったカリキュラム構造は現在までも引き継がれている。しかしこうしたカリキュラム構造に対して片上は、高校においてこそ総合的な教科による学習を取り入れ、分化から総合へと移行するカリキュラム構造を採用するべきと反論する⁶⁾。なぜなら、そうしたカリキュラムとすることで、小学校からの社会認識教育を総括し、社会的人間形成に資する教科が高等学校の特に最終学年には必要で、そうした教科における教育を行なうことで、民主主義社会をなす「よき市民」の形成が可能となると考えられるからである。

今回の分析対象は、分化から総合へと移行するカリキュラム構造を取っている。そのため、これまで我が

国で当たり前と考えられてきた総合・分化型のカリキュラム構造のあり方に対して疑問を呈することができる。氏の示したようなこうした考えを具現化するための教育内容編成構造を解明できると考える。

以上のような意義を鑑み、まずⅡ、Ⅲ、Ⅳで、2つのシリーズそれぞれについて、全体構成と単元構成の2つの観点から内容編成を分析する。そしてⅤで、分析結果を比較・考察することによってスコープ構造・シークエンス構造を確定させ、それら構造に内在する内容編成原理の解明をおこなうこととする。この具体的手順にしたがって、両シリーズが示した歴史的・社会的認識形成のための教育内容編成論の、歴史的・現代的意義を検討することとした。

Ⅱ 『街とその周辺』シリーズにおける単元の全体構成と内容領域 — 現代ブリテン島社会の現象的認識形成 —

『街とその周辺』シリーズは1981年に発行され、主として11歳から14歳用の教科書となっている。本シリーズの単元一覧を表1として提示しよう。

本シリーズは全部で9冊からなっている。地理、歴史、社会研究の各領域からそれぞれ1冊ずつ計3冊で1つのセットを構成しており、こうしたセットが3つ存在する。この時、3つの領域はそれぞれ地理研究コース、歴史研究コース、社会研究コースとして、それぞれ独立させて教授することも可能となつてはいるが、各セット単位での学習が本来的にはめざされている。

各セットは、全体としてブリテン島社会固有の特徴の把握をおこなうものとなっているという共通点が見られる。ただしその把握をめざす特徴の内容によって大きくは、個別的なもの、ブリテン島社会内部の地理的・歴史的な多様性（ある地域・時代の個別的な特質）、の獲得を主たる目的とするセット1と、連続的なもの、ブリテン島社会の形成過程に見られる特質（個々の特質に依拠し、ブリテン島社会がいかにして形成され、現在どのようになっているか）、の獲得をめざすセット2、3とに分けられる。以下、具体的に見ていこう。

セット1は『地域探検』、『過去探検』、『社会探検』の3冊からなる。

『地域探検』は「地図やグラフはどのように利用すればいいか？」から「地図に情報を書き入れよう」までの8つの単元で構成されており、全体として2つの部分に分けられる。

第1の部分は「地図やグラフはどのように利用すれ

表1 『街とその周辺』シリーズの単元一覧

単元名								
巻	章	巻	章	巻	章			
セット1	地理 地域探検	地理 土地と労働	岩石と景観	地理 われわれ が暮らして いる場所	過去の人々が暮らしていたところ			
			地表近くに存在する役立つ岩石		われわれが現在暮らしているところ			
			掘削と削石		都市での暮らし			
	セット2	歴史 過去探検	歴史 過去の生活	土地の農地利用	セット3 身の回り の過去	新興住宅地での暮らし		
				木々と森林		海岸沿いの街での暮らし		
				天気を理解する		田舎の農村での暮らし		
		セット1	歴史 過去探検	歴史 過去の生活	われわれの祖父はどのような暮らしをしていたのだろうか	セット3 身の回り の過去	教会と大聖堂	
					ヴィクトリア女王の時代の暮らし：農場労働者		カトリックVS. 英国国教会	
					ヴィクトリア女王の時代の暮らし：主人と召使い		交易と工業	
			セット1	歴史 過去探検	歴史 過去の生活	産業革命：工場と鉱山	セット3 身の回り の過去	産業革命
						産業革命：ウェッジウッド・チャイナ		慣習と伝統
						チューダー朝時代の暮らし		現在のチャドスリー・コーベット
セット1				歴史 過去探検	歴史 過去の生活	ノルマン朝時代のイングランド	セット3 身の回り の過去	第2次世界大戦
						過去の手がかり		慣習と伝統
						現在の余暇		現在のチャドスリー・コーベット
	セット1			歴史 過去探検	歴史 過去の生活	田舎での過ごし方	セット3 身の回り の過去	現在の人々の暮らし
						映画		違法行為
						ファンクラブ		エネルギー
		セット1		歴史 過去探検	歴史 過去の生活	つり	セット3 身の回り の過去	雇用と失業
						スポーツセンター		人々の移動
						屋内でのレジャー		

Lines, C. & Bolwell, L., *Town and around: Exploring the land*, Macdonald Educational, 1981. 他より、筆者訳出。

「ばいいか？」から「地図には何が描かれているか？」が相当し、自分たちの街の地図を手がかりに地図やグラフの学習における利用法を考え、ロンドン塔の地図と空中写真とを比べ、地図の特質について学ばせるなどしている。そのため、地域を探検（研究）する上で必要な地図の役割（利用法）、本質、内容についてそれぞれ学習させているといえる。よって、地域を探検にとって最も基礎的な読図技能を、ここでは学ばせていることになる。

他方、第2の部分は「移動」から「地図に情報を書き入れよう」が相当し、ロンドンの地下鉄の路線図、ブリテン島の天気図、ケズィックとケンブリッジの月別降水量の棒グラフ、1951～76年における映画館利用者の年次推移を示す折れ線グラフといったさまざまな道具を用いて、イギリスという身近な地域の探検（研究）を実際に行い、それによってさまざまな道具（地図やグラフ）の使い方になれ、自国内のさまざまな地域の気候・移動・産業における特異な現状に関して、個別的・多面的に理解することがなされている。

そのため『地域探検』においては、地域研究の方法の習得と現在のさまざまな地域環境に見られる多様性の把握とがおこなわれていることになる。

こうした『地域探検』の学習に端的に表れているように、セット1では、研究方法の習得と歴史や地理、社会研究といった各領域の学習において、現在のさまざまな地域の地域環境、自国の生活史、現代のイギリス社会、に見られる各地域・各時代の特徴、すなわち地域探検、歴史探検、社会探検によって明らかとなるイギリス国内の地理的・歴史的・社会的な多様性、を

個別的に把握する学習を行なっている。そしてそうした各領域の学習に基づき、ある特定の地域・時代においてさまざまな多様性を具体的に持つブリテン島社会、というブリテン島社会の特徴の把握をおこなうものとなっている。そのため、個別的なものを現象的に捉えさせる、つまり個別的現象的認識を形成させるものとなっている。

これに対して、セット2と3では、現代ブリテン島社会の形成過程に関わる認識、すなわちブリテン島社会の連続的現象的特徴の把握がなされている。

例えば、セット2は『土地と労働』、『過去の生活』、『余暇の利用』の3冊で構成されており、自然の影響を受けながら生活様式を発展させ、余暇を十分に満喫できる余裕のある社会を構築してきているという現代ブリテン島社会の特質を把握することとなっている。

なぜなら、全部で6つの単元からなる『土地と労働』は、大きく2つの部分に分けられ、前半部では人類（自国民）による自然環境の鉱業的・工業的利用について、後半部では人類（自国民）による自然環境の林業的・農業的利用についてそれぞれ学ばせている。次に『過去の生活』においては、先にブリテン島における過去の生活様式を個別的・倒序的に学習させ、その上で、身近なものを手がかりに社会の歴史的变化を時系列的に概観させる構成によって、生活様式を中心としたブリテン島社会の発展を学習している。最後に『余暇の利用』においては、歴史的に見て余暇にかかる時間が増大し、非常にゆとりのある社会となっていることをまず示し、その上で現在の余暇活動の実態を個別的に学ぶこととなっている。

つまり、セット2ではこれらの3冊の学習によって、われわれは自然環境を工業や農業に利用しながら生活様式を進展させ、ゆとりある社会を構築するに至っているという地理的・歴史的に形成されてきたブリテン島社会の形成過程に見られる特徴を把握することとなっているといえるからである。

同様にセット3においても、『われわれが暮らしている場所』、『身の回りの歴史』、『現在のブリテン』の3冊の学習によって、課題に立ち向かいながら地域的・歴史的に多様に発展してきた社会であること、そして現在さまざまな課題を抱えている社会であることというブリテン島社会の特質の理解がめざされている。これら2つの命題から類推される結果として、自社会が課題の克服に努めながら発展してきたものである以上、現在直面している課題に対してその克服に努めるような社会を形成していく必要があるという、今後の自社会の形成に向けた方向性を暗に指示しているといえる。そのためセット3は、ブリテン島社会の形成過程とそれに基づく今後のブリテン島社会の形成の方向性の2つの観点から、ブリテン島社会の諸事象を連続的に把握させ、その特徴の把握をおこなわせているものとなっている。

このようにセット2, 3では現在にかけてどのように形成してきたか、という観点から、その延長に立って今後どのように形成していく必要があるかという視点も含みつつ、地理・歴史・社会研究の各分野の学習に依拠し、現代ブリテン島社会の形成過程に関わる認識を形成させていることになる。そのため社会の変容を視野に入れながら個別的なものを現象的に捉えさせ、連続的現象的なブリテン島社会の特徴に関する認識を形成させていることになる。

以上見てきたように、セット1では個別的(点的)、セット2, 3では連続的(線的)という違いが存在したが、全体として、ブリテン島社会に関する現象的特徴の把握をおこなうシリーズとなっているといえる。

Ⅲ 『社会生活』シリーズにおける 単元の全体構成と内容領域 — 現代社会の構造的認識形成 —

『社会生活』シリーズは1980年に発行され、主として14歳から16歳用の教科書となっている。本シリーズの単元一覧を表2として提示しよう。

表2より、本シリーズが全部で7巻からなっており、『街とその周辺』シリーズとは異なり、地理や歴史といった領域に分かれておらず、全体を通して社会研究をおこなうものとなっていることが分かる。

第1巻『中核となる内容』は「社会研究とは何か」から「一つになる世界」までの8つの単元からなり、大きくは2つの部分に分けられる。

前半部は「社会研究とは何か」が相当する。ここでは、社会研究とは社会的存在である人類やその人類が抱える共通の課題について考察するものであることや、さまざまな手法によって得られたデータを分析し解釈し意味づけすること、というように、社会とは研究の対象であること、とその研究の本質について、学ぶ部分となっている。

一方後半部は、「個人」から「一つになる世界」までが相当する。ここでは、社会とその構造に対する一般的な見方・考え方を提示しているといえる。

なぜなら「個人」と「社会集団」では、社会を構成する個人や集団といった下部組織について、ニューギニアなどの事例研究を踏まえながら、地域的・歴史的な多様性を持つものとして捉えさせている。そして、「家族」から「社会的な統制」においては、例えばネパールのシェルパ族の社会的分業体制の変容などを事例に、家族、教育、労働、政治、秩序といった、以後の各巻で学習する社会を構成する諸要素について、ある地域におけるそれら諸要素の歴史的变化について概説的に述べる。それによってそれら諸要素の地域的・歴史的な多様性を意識させることとなっている。最後に「一つになる世界」では、現代社会を今後大きく変容させると思われるグローバル化について簡単に触れ、社会構造の変容可能性について述べられている。よって、社会は同一の構造的性を持つが、それを構成する各要素は多様性や変容性を持つものであるという、社会とその構造に対する一般的な見方・考え方を提示しているといえる。

よって『中核となる内容』は、本シリーズ全体を通しての導入的な部分と見なすだろう。

第2巻『社会における学習』は「早期の学習」から「生涯学習」までの9つの単元からなり、大きくは2つの部分に分けられる。

前半部は「早期の学習」から「学習過程」までが相当する。この部分は教育が持つ機能や役割といった一般的な概念について学習する部分となっている。なぜなら「早期の学習」と「社会に適応すること」では、早期教育や教育による文化の習得によってはじめて社会化を達成すること、すなわち教育の重要性について学ばせている。そして「成長」において成長に関する考え方やその歴史的相違について学ばせ、最後に「学習過程」で教育による成長の過程、すなわち教育と発達との関係性について学ばせる。そのため教育に関する一般的な概念の習得が可能となっている。

表2 『社会生活』シリーズの単元一覧

		単元名						
第一巻 中核となる内容	社会研究とは何か	早期の学習	家族とは何か	労働とは何か	秩序とは何か	共同体とは何か	政治とは何か	
	個人	社会に適応すること	核家族化の進展	工業化	秩序の定義	伝統的な共同体	政治と家族	
	社会集団	成長	個人と家族	工業社会を構築するためのさまざまな方略	社会はどのようにして秩序立てられているか	ルールと困習	政治と労働	
	家族	学習過程	なぜ結婚するのか	誰がどんな仕事をしているのか	秩序からの逸脱	組織的な共同体	政治と秩序	
	生活設計	知識と権力	現在の家族	労働、財産、生活様式	家族と秩序	今日の共同体	社会における政治	
	地位と権力	すべての者に教育を	国家と家族	今日の労働	労働と社会	計画的な共同体	政治と共同体	
	社会的な統制	学校は独自性を持つことができる	プリテンにおける少数派	未就労者	あなたが信仰するものは何ですか	共同体における諸問題	市民権	
	一つになる世界	大学	家族は今後どこへ向かっていくのか	労働の世界における変化	政府	少数派の共同体	地方政府	
		生涯学習			秩序と無秩序	労働と共同体	中央政府	
					秩序の維持	共同体が行うサービス	立法	
				秩序の変容	将来	権力と統制		
				将来				

Watt, M., *A Social Life: Core Book*, Macdonald Educational, 1980. 他より、筆者訳出。

他方後半部は「知識と権力」から「生涯学習」までが相当する。ここでは、教育制度の歴史的發展過程について学習している。なぜなら「知識と権力」と「すべての者に教育を」においては、19世紀と20世紀を通じた教育の大衆化の軌跡について学ぶ。そして「学校は独自性を持つことができる」から「生涯教育」では、フリースクールなど、現在の教育界でなされている新たな試みとしての教育機関の多様化などといったものについて学ぶからである。

以上のことから、『社会における学習』では、教育について、まずその一般的な概念について触れ、その後歴史的發展過程について触れることによって、現代社会における教育という要素が、社会の構造上いかなる位置を占め、歴史的にいかんそれを構築してきたかを学ばせることとなっている。

こうした単元構成は、以下『家族』、『労働の世界』、『秩序と無秩序』、『共同体』の各巻に共通し、それぞれの巻において、社会の下部組織としての家族や共同体、社会を構成する要素としての労働や法秩序について、現代社会におけるそれら各要素が、社会の構造上いかなる位置を占め、歴史的にいかんそれを構築してきたかを学ばせることとなっている。つまり、『社会における教育』から『共同体』までの各巻は、社会における各要素がいかなる構造を持っているのか、社会においていかなる位置や役割を占めているのか、そして社会においてそれをいかにして形成してきたのか、を個別に学ぶ構成となっているといえる。

これに対して第7巻『社会における政治』は、これまでの各巻と異なる編成をとっている。本巻は「政治とは何か」から「権力と統制」までの11の単元からなり、大きくは3つの部分に分けられる。

第1の部分は「政治とは何か」が相当し、政治の重要性や役割などといった政治の本質について学ぶ部分となっている。次に第2の部分は「政治と家族」から

「政治と共同体」までが相当する。ここでは、これまでの各巻で学習してきた家族や秩序などといった社会を構成する下部組織や各要素と政治との関わりについて、それぞれ個別に学ぶ部分となっている。そして第3の部分は「市民権」から「権力と統制」までが相当し、政治の仕組み、すなわち選挙制度、行政組織、司法制度、立法制度、権力の分立についてそれぞれ具体的に学ぶ部分となっている。

こうした構成から、『社会における政治』は、現代社会における政治という特定の要素の構造を提示するだけにとどまらず、これまで断片的に学習してきた社会を構成するさまざまな要素を、政治を基軸としてまとめ上げ、社会全体の構造を把握させるための構成となっているといえる。そしてその上でそうした政治の仕組みやそこに構成員たる個人がいかん関わっているのかを示すことで、個人が政治を規定し、政治が社会の諸要素を規定し、その諸要素によって個人が規定されるといった、社会の全体的な関係性や構造性を理解させることとなっている。

以上のことから、本シリーズでは、第1巻において社会の全体構造を概観し、第2巻から第6巻まで、各要素についてその本質的な側面（社会における役割やその構造）とその歴史的な側面（各機能の歴史的展開過程）から個別に学習し、第7巻で政治を基軸として各要素をまとめ上げるという構成を取ることで、現代プリテン島社会の構造的特徴の把握、そしてその構造をさらに一般化することによって判明する個別的な諸要素の関係性に基づく現代社会全体の一般的な構造性の把握を行っているといえる。

IV. 単元の内容配列から見た学習内容の構造性の相違

前章の分析より、形成をめざす現在の社会に関する

認識に、個別的現象的、連続的現象的、構造的の3つのレベルが存在することが判明した。それでは、そうした認識を形成させるために、各小単元の学習は、いかなる学習内容を組織しているのであろうか。そしてそれによって上述の認識形成にいかなる役割を果たしているのか。3つのレベルすべてにおいて学習されている産業革命を事例として取り上げ、それらの比較を通して、学習内容やその内容配列の差異を鮮明にし、上述の問題に対して考察したい。分析対象としては、個別的現象的段階である『街とその周辺』シリーズのセット1より「口述の歴史」⁷⁾、連続的現象的段階である『街とその周辺』シリーズのセット2、3より「産業革命：工場と鉱山」⁸⁾、構造的段階である『社会生活』シリーズより『労働の世界』の小単元2「工業化」⁹⁾を選択した。

1. 小単元「口述の歴史」における学習内容の構造化ー当時の社会の固有性・特異性の把握ー

小単元「口述の歴史」において示されている文章や図表を手がかりに、本単元において示される知識命題を列挙し、その命題を概括化していくことで、個別的現象的な社会認識を形成させる場合、産業革命が起きた時代について、いかなる知識をもとにいかにつえさせようとしているのかを分析したものが、表3である。表中の知識命題の部分は訳出による。

表3に基づく分析より、本小単元が、聞き語りをもとに、固有性・特異性の観点からの産業革命期の特定の社会の理解をめざしていることが分かる。

なぜなら、本小単元においては、冒頭で口述の歴史

(聞き語りによる歴史)の特質について触れる。そのうち、大規模な人口移動という産業革命期の社会の一般的な現象について触れ、そうした現象によって発生したある地域における人口減少の実態や、その地域における輸送という分野での特質について学習することとなっている。そして最後に、口述の歴史の問題性とその解決方略について学習する。これらのことから、口述という学習方法に基づき、産業革命期のある社会の固有性・特異性について学習させようとしているといえるからである。

それでは、本小単元の学習は、個別的現象的社会認識形成に対して、いかなる役割を果たすよう組織されているのであろうか。結論から言えば、本小単元の学習は、過去の社会に関する個別的な認識を形成させ、それに基づき、そうした過去の社会の総和としての現代ブリテン社会、という社会の特質に関する認識形成をおこなうものとなっているといえるだろう。

というのも、本小単元において形成される認識は、産業革命期の社会の固有性・特異性であった。この時、セット1で全体として形成がめざされている社会認識はブリテン島社会の個別的現象的認識であるから、形成がめざされる社会認識と本小単元の学習の結果との関係は、全体と全体の中の一部を構成する独立した部分との関係となり、結果的に形成をめざす社会認識の一部とはなるが、歴史認識を習得すること自体が本小単元の学習の目的となる。したがって、各小単元において形成される歴史的社会に関する認識を累積させることで社会認識形成をめざすよう組織されているということであり、歴史認識形成を目的とする単元構成と

表3 「口述の歴史」における知識命題と単元の構造

知識命題	単元の構造	
口述の歴史とは、古者への聞き語りをもとにした歴史のことである	口述の歴史の特質	聞き語りによる固有性・特異性の観点からの産業革命期の社会の固有性・特異性
むかし(祖父母や曾祖父母が幼少の頃、19世紀)、多くの人々が仕事を求めて、生まれ故郷を離れた	産業革命期の社会の実態としての大規模な人口移動	
就いた仕事によっては、何度も転居を余儀なくされ、子どもたちは祖父母らと離れて暮らすこととなった	大規模な人口減少が見られた産業革命期のある社会の実態	その時代の一般的な現象
しかし、サウス・ウェールズの鉱山の街Bedlinogのように、移住者がほとんど来なかったところもあった	口述に基づくある社会の歴史の具体的な調査	
多くの人々が仕事を求めBedlinogから出ていったが、移住してくる人はほとんど無かった	その時代の地域の個別の現象	その時代の社会の固有性・特異性
小さくて古い住居ばかりが点在するこの街を離れ、より暮らしやすい住居を求めて、都会へと移住するものもいた	輸送という側面から見た産業革命期から現在までのある社会の実態	
ある小学校のあるクラスでは、28人中21人が、この村の生まれで、うち15人が、祖父母と暮らしていた	口述の歴史の問題性とその解決方略	その時代の社会の固有性・特異性
このクラスでは、祖父母への聞き語りを通して、この街の歴史を調べることにした		
ある少年は、輸送について、以前炭坑で働いていた祖父母の兄弟に聞いて調べることにした		その時代の社会の固有性・特異性
少年は、何度もその人物のもとを訪れ、テープレコーダーを使って会話を記録し、分かったことをまとめた		
この村では、道路整備の遅れから、古くて使いにくい道路を利用し続けため、輸送が非常に困難だった		その時代の社会の固有性・特異性
輸送には荷車をもっぱら用いていた		
農地は小さく、またやせていたので、収量もあまり多くはなかった		その時代の社会の固有性・特異性
収穫時には、馬に荷車を引かせるとともに、お互いに協力合って農作業に従事した		
鉱山の仕事においても馬は用いられた		その時代の社会の固有性・特異性
坑夫の賃金の一部は現物支給で、馬で運んできた石炭を家の前に野積みし、暖を取るのに使っていた		
輸送にはボギーが使われることもあった		その時代の社会の固有性・特異性
村に鉄道が引かれるようになると、輸送や移動手段は鉄道が主となり、人々は始発に乗って通勤するようになった		
1928年にバスのサービスが開始された		その時代の社会の固有性・特異性
1948年の冬、非常に大雪が降ったため、鉄道や道が使えなくなり、それを使って移動するものもいた		
1961年に駅は閉鎖されたが、石炭の輸送には鉄道が使われ続けた		その時代の社会の固有性・特異性
かつては自家用車を持つものはいなかったが、現在では移動手段はもっぱら自家用車となっている		
この記述はある一人の老人から聞き取ったもので、彼が記憶違いをしていないかの保障はどこにもない		その時代の社会の固有性・特異性
この記述が正しいということを証明するためには、村の他の人々に聞いてみるのもいいだろう		
または、図書館へ行って過去の新聞を探すのもいいかもしれない		その時代の社会の固有性・特異性

Lines, C. & Bolwell, L., *Town and around: Exploring the past*, Macdonald Educational, 1981, pp8-15, より、筆者作成。
 表中の「知識命題」の部分は訳出により、「単元の構造」の部分は筆者の分析による。

なっていたということである。

以上のことをまとめると、本小単元は、特定の時代の過去の社会に関するいくつかの個別的な事象を教授することで、その時代の過去の社会そのものについての理解を目的とし、結果的に社会的認識形成に寄与しようとする単元構成となっているといえるだろう。

2. 小単元「産業革命：工場と鉱山」における学習内容の構造的性—当時の社会の変容性と現代社会との相違性の把握—

小単元「産業革命：工場と鉱山」において示されている文章や図表を手がかりに、本単元において示される知識命題を列挙し、その命題を概括化していくことで、連続的現象的な社会的認識を形成させる場合、産業革命が起きた時代について、いかなる知識をもとにいかにつまみ取らせようとしているのかを分析したものが、表4である。表中の知識命題の部分は訳出による。

表4に基づく分析より、本小単元が、変容性・相違性の観点からの産業革命期の社会の理解をめざしていることが分かる。

というのも本小単元では、冒頭、産業革命によって当時のブリテン社会において産業が振興し、国家の富裕化と強大化が起こったこと、つまり産業革命がもたらした社会変容について述べられる。その上で、機械・技術の進歩、人口の都市への集中、都市の発展という、産業革命期に起きたさまざまな分野での変化について述べている。そのため、社会全体と社会のある要素との二つの観点から、産業革命によっていかなる変化がその時代のその社会に起きたかを具体的に学習するこ

ととなっている。

本小単元においては、こうした変化の学習の後、産業革命期の労働者の生活の実態について詳しく学習することとなっている。この当時の家族構成や子育て、自分たちと同世代の子どもたちの暮らしなど、自らの経験と照らし合わせやすい分野における、現代とは全く異なる当時の実態を詳しく学習することで、現在と当時の社会における相違性の把握が可能となっているといえるだろう。

以上のことから、本小単元は、変容性・相違性の観点からの産業革命期の社会の理解をめざしているといえるのである。

それでは、本小単元の学習は、連続的現象的な社会的認識形成に対して、いかなる役割を果たすよう組織されているのであろうか。結論から言えば、本小単元の学習は、過去の社会の歴史的な形成過程や社会変容に関する認識を形成させ、それに基づき、そうした歴史的な形成（発展）の帰結としての現代社会、という社会的認識の形成をおこなうものとなっているといえるだろう。

というのも、本小単元において形成される認識は、産業革命期の社会の変容性・相違性であった。ということは、セット2, 3で全体として形成がめざされている社会的認識はブリテン島社会の連続的現象的な認識であるから、本小単元の学習の結果形成されるブリテン島社会の歴史的な形成過程は、形成がめざされている社会的認識と同値のものということになる。したがって、各小単元において形成される社会の歴史的な形成過程に関する認識を転用することで社会的認識形成をめざすよう組織されているということであり、歴史的認識形成を

表4 「産業革命：工場と鉱山」における知識命題と単元の構造

知識命題	単元の構造		
ヴィクトリア朝時代、産業の振興と交易の拡大によってブリテンは富裕で強大な国家となった	社会発展	産業革命期に起きた社会変化	変容性・相違性の観点からの産業革命期の社会的理解
200年ほど前、すなわち1760年頃から1830年頃にかけて、産業の分野で大変革が起こった この時代を産業革命と呼び、人類が機械を発明し、工場を建設し、機械を導入することで生産性を飛躍的に向上させたのである 例えば、1764年、ハーグリーブスが同時に8本もの紡績が可能になるジェニー紡績機を発明した こうした紡績機を導入した大規模な紡績工場が建設されるようになった 工場が完成すれば、多くの労働力が必要となり、田舎から多くの労働者を受け入れ、工場を中心に都市は成長していった	産業の機械化		
産業革命は、人々の生活様式に大きな変化をもたらした 工場が完成した当初は、工場主は自分の好きなように経営でき、労働者は、自らの労働条件について、いさかいを出できなかった 労働者たちに十分な賃金を払ってでも良かったし、逆に劣悪な労働条件を設定しても良かった	都市の工業化に伴う生活の変容	現在と全く異なる産業革命期の生活の実態	
1849年、マンチンスタールにある工場の労働条件について調査していたある新聞記者が、ランカスターにある新聞社にある記事を送ってよこした それによると労働者たちは、一日十二時間勤務で、非常に過酷な労働条件となっていた また19世紀当時、家族は現在のように核家族化しておらず、非常に大人数だった 家族が富裕でなければ、母親も働かざるを得ず、その労働は非常に激しいものであったため、十分な睡眠を取る必要があった 母親たちはアヘンが混入されている赤ん坊用の混合薬を赤ん坊に買い与え、夜泣きを起こさせないようにした 当時のベビーシッターたちもまた、できるだけ自分の仕事を少なくしたいがために、母親と同じく薬を赤ん坊に与え、眠らせることとした そのため多くの子どもが病気で薬物中毒になり、死ぬものもいた また、若年層の労働条件の実態についての調査報告を讀むと、子どもたちの労働条件は非常に過酷なものだったことが分かる 1840年当時、ブリテンでは、子どもたちは学校に行かなければならないというわけではなかった 多くの学校はチャリティで運営されており、貧しい家庭では、子どもを学校にやる余裕が無く、子どもたちの賃金がなければ生活できなかった	都市の工業化		
	当時の労働状況		
	当時の家族形態		
	当時の育児実態		
	当時の子供たちの生活実態		

Lines, C. & Bolwell, L., *Town and around: Life in the past*, Macdonald Educational, 1981, pp.18-23, より、筆者作成。
表中の「知識命題」の部分は訳出により、「単元の構造」の部分は筆者の分析による。

目的とするも、それが直接的に社会認識形成ともなりうる単元構成となっていたということである。

以上のことをまとめると、本小単元は、特定の時代の過去の社会に関するいくつかの個別的事象を手がかりに、その社会がいかに成立し、その内部でいかなる変容が見られたか、すなわちある過去の社会の成立・展開過程をも含めた社会変容構造を理解させることを目的とし、それによって現代社会を発生的に説明することを可能にし、現代社会に関する認識の形成に寄与しようとする単元構成となっているといえるだろう。

3. 小単元「工業化」における学習内容の構造的性—当時の社会の変容性と現代社会との関連性の把握—

小単元「工業化」の小見出し名を左列に示し、それらの各部分で示されている文章や図表を手がかりに、構造的な社会認識を形成させる場合、産業革命が起きた時代について、いかなる知識をもとにいかにつまみとせよとしているのかを分析したものが、表5である。表中の単元名の部分は訳出による。

表5に基づく分析より、本小単元が、変容性・関連性の観点からの産業革命とそれに基づく社会の理解をめざすものとなっていることが分かる。

なぜなら、本小単元においては、冒頭、工業化によって人口構造の変化が見られ、現在の工業化社会に共通してみられる人口構造が成立したことで工業化が当時の社会に多大な変化を与えたこと、つまり工業化によって当時の社会や現代の社会に影響が見られたことを学習する。そして産業革命によって当時の社会が農業中心社会から工業化社会へと変容したこと、そしてその工業化によって現代社会にも多大な影響が見られたことを、具体的に学習することとなっている。そのため、産業革命による当時の社会変容とその現代社会への影響（関連性）についての学習となっているからである。

また本小単元の後半部では、産業革命期の工業化による労働者搾取の実態と、そうした工業化した社会における労働者の労働環境や生活環境の実態が学ばれ、それが政府主導によって、徐々に改善されていったことが示される。つまり産業革命期の労働者の日常生活における実態と変容について学習しているわけである。

これらのことから、本小単元は、産業革命による当時の社会の変容とその現代への影響の学習、変容性・関連性の観点からの産業革命とそれに基づく社会の理解の学習となっているといえるのである。

それでは、本小単元の学習は、構造的な社会認識形成に対して、いかなる役割を果たすよう組織されているのであろうか。結論から言えば、本小単元の学習は、社会認識の歴史的な形成過程に関する認識を形成させ、それに基づく現代社会認識形成をおこなうものとなっているといえるだろう。というのも、本小単元において形成される認識は、産業革命期の社会の変容性・関連性であった。この時、『社会生活』シリーズで全体として形成がめざされている社会認識は現代社会の構造的認識であるから、本小単元の学習の結果は、めざす現代社会の構造に関する認識を歴史的に説明し、正当化するために間接的に利用されているという関係になっている。したがって、本小単元において形成される社会認識の歴史的な形成過程に関する認識を構造化することで社会認識形成をめざすよう組織されているということであり、歴史認識形成を手段とする単元構成となっていたということである。

以上のことをまとめると、本小単元は、特定の時代の過去の社会に関するいくつかの個別的事象を手がかりに、その社会がいかに成立したか、そして現代社会の現状を説明するために、それに影響を与えた側面のみを選択し、その側面からその当時の社会がどのように成立・変容したかを理解させることを目的とし、現代社会に関する認識を形成させるために必要な過去の

表5 「工業化」の構造

単元名	単元の構造		
工業化	工業化による人口構造の変化(現在の人口)	産業革命により当時の社会や現代の社会に影響が見られたこと	産業革命による当時の社会変容とその現代社会への影響
工業化の始まり	工業化が当時の社会に多大な変化を与えたこと		
工業化以前のプリテンにおける生活	産業革命以前の農業社会としての社会体制の実態	産業革命による変化としての社会の工業化	
産業革命	産業革命による当時の社会体制の変化の実態		
産業革命を可能にした要因	産業革命(社会の工業化)を実現させた社会的要因		
産業革命はわれわれにどういった影響を与えたか	産業革命の現代社会への影響としての工業化		
19世紀の工業化したプリテンにおける生活	産業革命期の工業化による労働者搾取の実態	産業革命期の労働者の生活の実態とその変容(改善)	
生活状況	産業革命期の労働者の生活環境の実態	生活状況・労働条件に見られる実態	
労働状況	産業革命期の労働者の労働環境の実態		
政府と工業化	政府による労働条件改善の軌跡		

Street, H. *A Social Life: A Working World*, Macdonald Educational, 1980, pp.8-11, より、筆者作成。
 表中の「単元名」の部分は訳出により、「単元の構造」の部分は筆者の分析による。

社会に関する認識を構造化して教授することで、社会認識形成に寄与しようとする単元構成となっているといえるだろう。

V. 教育内容編成構造と原理

これまでの分析結果をもとに、社会認識形成のための歴史教育内容編成構造と原理との抽出を試みる。そのため図1を作成した。

図1は、これまでの分析結果から明らかになった教育内容編成構造を示したもので、二つのシリーズの全体構成についておこなったこれまでの分析結果を、図中の左列に配した。また、単元構成の差異から明らかになった分析結果を、図中の上列に配した。その上でこうした教育内容編成からうかがえる、本シリーズの各学校段階における学習の構造とその段階性を抽出したものである。

まず全体構成についてだが、『街とその周辺』シリーズでは、全体としてブリテン島社会固有の個別的な特徴の把握をおこないつつ、セット1ではある地域・時代の個別的な特質の獲得を主たる目的としており、セット2,3では個々の特質に依拠し、ブリテン島社会がいかんして形成され、現在どのようになっているかに関する認識を形成させていた。また『社会生活』シリーズでは、個別的な諸要素の関係性に基づく現代社会全体の一般的な構造性の把握を行っていた。そのため、まとめると、図1の左列のようになるだろう。

一方、単元構成について見てみると、「口述の歴史」では固有性と特異性、「産業革命：工場と鉱山」では変容性と相違性、「工業化」では変容性と関連性、の観点から、産業革命期の社会の特質の把握がめざされ

ていた。この時、変容性や関連性という観点は、固有性や特異性を把握しなければ導出できないものであるから、当時の社会の固有性だけの学習にとどまる「口述の歴史」と当時の社会の固有性に基づく変容性や関連性の学習をおこなうそれ以外の二つの小単元の学習という入れ子型の関係性が見られることが指摘できる。

また、固有性を理解するということは、その事象単独の理解で可能となるが、変容性や関連性の理解のためには、複数の事象を組み合わせた上での理解が必要となる。さらに固有性や変容性は、過去の社会そのものに関する理解であるが、相違性や関連性は過去の社会の理解を通じた現代社会の理解でもあるため、こうした各小単元の学習には、本質的に大きな隔たりがあることも見て取れる。

その上、それらの各小単元における学習が、それぞれにおいて形成をめざしている個別的現象の認識、連続的現象的認識、構造的認識に対して、それぞれ累積、転用、組織化というように段階的に順次移行していることも判明した。よって、図1の上列のようになるだろう。

それでは、なぜこうした内容編成構造を採用しているのだろうか。『街とその周辺』シリーズのセット1は特定の時代の過去の社会に関するいくつかの個別的な事象を教授することで、過去の社会そのものについての理解を目的とし、結果的に社会認識形成に寄与しようとする単元構成となっているとまとめられる。よって歴史的社會に関する認識形成をめざす教育となっている。また『街とその周辺』シリーズのセット2,3は、特定の時代の過去の社会に関する個別的な事象を手がかりに、ある過去の社会の成立・展開過程をも含めた社会変容構造を理解させることを目的とし、

シークエンス		『街とその周辺』シリーズ			『社会生活』シリーズ
		累積に基づく認識形成	転用に基づく認識形成	組織化に基づく認識形成	
		固有性と特異性	変容性と相違性	変容性と関連性	
		単一事象理解	複数事象(変化・関連)理解		
		歴史社会理解	現代社会理解		
『社会生活』シリーズ	現代社会全体の一般的な構造性の把握	構造的			社会認識の歴史的形成
	『街とその周辺』シリーズ	現代ブリテン島社会に関する現象的特徴の把握	連続的	歴史的社會に関する歴史的認識の形成	
			個別的	歴史的社會に関する認識形成	

図1 『街とその周辺』シリーズと『社会生活』シリーズにおける教育内容編成構造

それによって現代社会を發生的に説明させ、現代社会に関する認識の形成に寄与しようとする単元構成となっていた。よって歴史的社会に関する歴史的认识の形成をめざす教育となっているといえよう。

そして『社会生活』シリーズは、現代社会の現状を説明するために、それに影響を与えた特定の時代の過去の社会に関する個別的事象を手がかりに、その当時の社会がどのように成立・変容したかを理解させることを目的とし、現代社会に関する認識を形成させるために必要な過去の社会に関する認識を構造化して教授することで、社会認識形成に寄与しようとする単元構成となっているため、社会認識の歴史的形成をめざす教育となっていると定義できる。つまり、図1の左列や上列にあるような内容編成構造を取ることで、歴史的社会に関する認識形成をめざす教育、歴史的社会の歴史的认识形成をめざす教育、社会認識の歴史的形成をめざす教育、をそれぞれ実現させることとなっているということである。

これら3つの教育は、歴史的社会認識形成をいかにしておこなっていくのか、その方略において全く異なるものとなっており、教材と教育内容との関係性が段階的に密なるものへと変容しているといえる。そしてそれによって、歴史を分かる学習、歴史を分かることで結果的に現代をも分かる学習、現在を分かるために歴史を手段的に分かることをめざす学習が段階的に組織され、教育内容の一般化にもなって、教材そのものの目的的理解から手段的理解へと単元の学習を変え、歴史認識形成から社会認識形成へとその教育目的を変更させているという特質も有するものとなっていたとまとめられるだろう。

VI. 結 語

本研究の目的は、これまで意義あるものとして認められてきている、実用主義的な側面を持つ教育論に基づく教育内容編成構造を、イギリスのMacdonald Educational社が、Environmental Studies用の教材として、1980年代初頭に発行した『街とその周辺』シリーズと、『社会生活』シリーズという二つのシリーズを手がかりとして、具体的に解明し、そのあり方を検討するものであった。

分析の結果、両シリーズの内容編成の特質としては以下3点があげられる。第1は教育内容と教材の選択に関するもので、教育内容を現代社会に関する認識とし、そのために社会の諸機能・諸要素別に教材を配列し、社会機能の歴史となっているということである。

第2と第3は、教育内容配列と教材配列に関する特

質である。第2は、形成される教育内容としての認識に個別的、連続的、構造的と定義づけられるような段階が確認でき、より一般的な現代社会に関する認識形成へと深化しているということである。そして第3としては、それぞれの教育内容把握のために、各小単元における教材そのものが、事象の固有性に関するもの、変容性に関するもの、関連性に関するものと段階的に変化し、それらの教材の把握を手がかりに、めざす社会認識形成を実現しているということである。そのため、教育内容の段階に合わせて、教材の種類の変化が確認できるということである。

分化から統合へと展開する教科構造において、上述のような段階的な教育内容編成がなされているということは、それによって歴史認識形成をめざす教育から社会認識形成をめざす教育へと変容させることともなり、歴史を分かる学習、歴史を分かることで結果的に現代をも分かる学習、現在を分かるために歴史を手段的に分かることをめざす学習となっており、歴史科歴史、歴史研究科としての歴史、社会科歴史とでも形容しうるようなイギリスの過去の歴史教育改革の流れを、一つのカリキュラムの中で再現したような教育内容編成構造となっていたということである。

そのため、従来の本質主義的な教育に対して、それを基礎と位置づけながらも、最終的には実用主義的な教育をおこなう非常に革新的な教育内容編成構造といえるだろう。

【註】

- 1) このような社会認識系教科の特質に関しては、松尾正幸「イギリス社会認識教育の動向と課題－総合的教科としての社会科 (Social Studies) を中心として－」『社会科研究』第23号、1975年、pp.86-94、などを参照のこと。
- 2) Lines, C. & Bolwell, L., *Town and around: Exploring the land*, Macdonald Educational, 1981, 他、全9冊。
- 3) Watt, M., *A Social Life: Core Book*, Macdonald Educational, 1980, 他、全7冊。
- 4) 例えば、森分孝治「歴史教育の革新－社会認識教育としての歴史教育－」『社会科研究』第20号、1972年、pp.60-77。など。
- 5) 前掲1)を参照のこと。
- 6) 片上宗二「総合性をもった中等社会科の教科構造を」『社会科教育論叢』第34集、1986年、pp.65-77。
- 7) Lines, C. & Bolwell, L., *Town and around: Exploring the past*, Macdonald Educational, 1981, pp.8-15。
- 8) Lines, C. & Bolwell, L., *Town and around: Life in the past*, Macdonald Educational, 1981, pp.18-23。
- 9) Street, H., *A Social Life: A Working World*, Macdonald Educational, 1980, pp.8-11。